会長さんを訪ねて

「地域の交流と融和を重点に地域振興・組織強化を目指す」

南三陸商工会
会長　須藤　彌代治氏

南三陸商工会は、本年四月一日に志津川町商工会と歌津町商工会が、行政合併（平成十七年十月一日予定）に先駆けて合併した商工会です。

行政との連絡・調整に心を砕きながら新商工会の運営に日々ご尽力されている須藤新会長さんをお訪ねいたしました。

―会長さんのご商売についてお聞かせください。

旧北上町のエリアに家庭用電化製品・CD等ソフト販売と一部配線工事を手掛ける株式会社たまや電気商会を経営しております。

終戦後の昭和二十年に父親が創業いたしまして、私が二代目となるのですが、創業以来六十年、地域に密着し、地域の皆様に支えられて来たからこそ大過なく家業を守ってこれたものと思っております。

また、昨今は我々家電業界も非常に厳しい状況が続いておりましたが、市場に薄型テレビのシェアアップ等の影響もあり、明るい兆しも見えてきていますので、これをチャンスとして捉え、リピーターの確保に経営の主眼を置き、我々の強みでもある大型店・量販店がカバーしきれていないアフターサービスを今まで以上に強化して、顧客満足度のアップを追求して行きたいと考えています。

―一口に二世代、六十年と言っても非常に永い年月と思いますが、やはり二代目として創業されたお父様の意思を継ぐ志を早くからお持ちだったのでしょうか。

若い頃の私は人並みに都会への憧れみたいなものがあって、そのような高尚な志は持っていませんでしたね。（笑）

地元の工業高校を卒業した昭和四十一年に松下電器産業に入社し、大阪・守口市で、カラーテレビの製造・販売・メンテナンス等をやりましたが、大阪でのサラリーマンとしての生活は公私共に新鮮なことばかりで、いろんな意味で勉強にはなりましたし、その頃は先ず自分のことが最優先だったように思います。

そんな私も、家督息子でしたので、親からの要請もあって昭和四十四年に地元に戻り、家業を手伝う傍ら商工会青年部に入ることとなったのですが、当時都会から戻ったばかりで目標を見失いかけていた私にとって、青年部の仲間達との交流は「地域への貢献」という自分の新たな目標を発見し、「地域人」としての芽を開かせてくれた貴重なもので、これ以後、私は商工人としての「自信」と「誇り」を持って商売を続けてこれましたし、「地域に同じ志を持った仲間がいる。」という事実は大きな励みとなりましたね。

また、人間は常に成長するものと言いますが、最近、親父の世代になってみて初めて、親父の商売への想いが何となく分かるような気がするんですよね。若い時分には親子とは言えよくわからなかったんだから不思議なものですよね。（笑）

―最近の地域の経済状況はいかがですか。

先ほども申し上げました通り、物販業における家電、また、水産加工業の一部に明るい兆しが見られるものの、本地域における経済情勢は企業の廃業・撤退等が続いておりますので、商売のみならず、我々中小企業のもう一つの使命である雇用の確保もままならない非常に厳しい状況にあると危惧しておるところです。

―合併商工会として今後の方向性等について、お考えをお聞かせいただけませんか。

本会は南三陸商工会として本年四月に発足しましたが、商業振興や地域振興等に強力な指導力を発揮し、合併したメリットを打ち出すためには今少し時間が必要です。本年十月に行政も合併する予定ですが、行政合併も成立し、名実ともに南三陸地域となって初めて行政と商工会が一つに協力して、このエリアのビジョンを真剣に検討することが必要で、本当の勝負はこの時だと思っております。

それまでの間、会長としての私の責務は、旧志津川町商工会員と歌津町商工会員が今まで享受してきた会員メリットを維持しながら、従来以上にエリア内の商売の交流を促し、イベント等の共有化を図ることによって、南三陸商工会の会員間のコンセンサスを形成し、郷土愛を育んで、土台を築くことだと思っております。

先ずは、「志津川湾夏まつり」や「歌津恋来浜まつり」を皮切りに、イベントを利用して会員交流の輪を広げて行きたいと考えております。

また、本年は折りよく旧志津川町商工会の商業部会と工業部会の有志が取り組んできた循環型社会への取組みが認められ、本年九月十三日、十四日の両日、商工会地区としては初めてリサイクルの全国大会（第八回全国リサイクル商店街サミット志津川大会）を持ってくることができました。全国の幅広い階層の方々との交流を通して、南三陸商工会の名を広く知らしめるとともに、会員に対しては新たな販路開拓の機会を提供し、地域振興・組織強化に繋げて行きたいと考えております。

県連をはじめとする関係機関の皆様には今後ともご指導・ご鞭撻をお願いいたします。

りあすエコステーション

元気な経営

がんばる女将さん

「常にお客様に感謝する気持ち」で～ 生涯現役を目指す～

有限会社まるみ社
取締役　佐藤　博美

今回は、サラリーマンの妻から商売人の副部長になった富谷町商工会女性部の副部長であり、また、有限会社まるみ社の若女将さん（取締役佐藤博美さん）を訪ね、奮闘ぶりを語っていただきました。

二十年前サラリーマンと結婚しました。はずなのに、いつの間にか自営業の妻。それもいつ仕事が入ってくるかわからない葬祭業。初めて来て住む町での商売。右も左もわからないまま、毎日無我夢中で暮らしてきました。親戚も友達も近くにいるわけでもなく、家族は、義母、夫、私、三人の子供と六人で本当にこの仕事ができるのかと悩んだ事も度々ありました。

当時、子供たちは小さかったので幼稚園の送迎等で忙しくなるとつい時間を忘れることがあったり全てが大変でした。しかし、宿場町の風情が残っている古風な町の中での開店ということもあり、ご近所の方や商工会員皆様のあたたかい気持ちがいつも心の支えとなりここまでやってこれました。

小さな店ですが、夫の考えで早くからワープロ、次はパソコンと最新の情報機器を導入したこともあって、使わざるを得ない状況になりましたが、夫に負けず私も興味がわき、「ダメでもともと」の精神で挑戦を繰返し、今ではひととおり仕事に活かせるようになり、本当に助かっております。

経営講習会で開催されるPOP教室や商工会等にはできるだけ積極的に参加しいろいろ勉強させてもらい、自営業の妻になった私にとっては何を聞いても新鮮なことばかりでした。

三年程前から商工会女性部に加入させていただき、異業種の方々との交流の場にも参加することができ一段と視野が広がりました。

現況の不景気風は、私たちの葬祭業も同様です。しかし、不景気とは気持ちを暗い顔ばかりしてはいられません。

切替えて『初心忘れるべからず』と前向きに考え、町内の皆さんに当店を覚えてもらおうと小さいながらも梵鐘や六地蔵などを置き、店の前を通る人、手作りのチラシを毎月新聞折込したり、店内を季節の花で装飾し、雰囲気づくりの工夫を。さらに新商品の案内をしたりと思いつく限り「働く女性」として夫と同様頑張っております。

仏様に関係ある仕事だからではありませんが商いの基本は、常に「感謝の気持ち」を忘れないことをモットーとしております。

また、数あるお客様の中から当店を選んでいただいたことに、これまた常に「感謝」しております。

お客様には、「感謝」の気持ちを合わせて楽しく商売をさせていただき、定年退職のない自営業の妻、私は、生涯現役で益々頑張れそうな気がします。と、商売への奮闘ぶりを語っていただきました。

まるみ社全景